

『近松会雑誌』とシェイクスピア

佐々木 隆

プロローグ

坪内逍遙以来、近松門左衛門とシェイクスピアの比較研究は取り組まれている。しかし、逍遙以前にも一八九四年十一月の塚越芳太郎『近松門左衛門』（民友社）には「結論 彼は多くの類似に於て日本の沙翁なり」が掲載されているが、本格的な研究は逍遙からとなる。本稿では東京ではなく、関西を中心に近松の研究会が発行した『近松会雑誌』に注目したい。

一 近松会

近松会は大阪で設立され、会長に土井通夫（一八三七・一九一七）、副会長は緒方正清（一八六四・一九一九）である。『近松会雑誌』の創刊号によれば、会則の日付は明治四十三年一月、すなわち一九一〇

年一月である。会長の土井通夫（一八七二年に土居通夫に改称）は大阪商業会議所会頭を務め、衆議院議員となるなど関西実業界の重鎮である。(一)土井は大阪の資産家として知られているが、中でも一九一一年に大阪市天王寺区の南部一帯を「理想的娛樂園」にしようと考えそのシンボルとして「通天閣」の建設を開始したことは有名である。通天閣は一九二二年七月三日に完成した。当時としては東洋一の高さ（七十五メートル）の巨大な塔で、「通天閣」の「通」の字は土井通夫氏の名前から取られたとも言われるが、通天閣オフィシャルサイトによれば、その命名は儒学者の藤沢南岳（一八四二・一九二〇）であるとし、一九八六年三月二十五日付の朝日新聞の記事を紹介している。(二)

副会長の緒方正清は明治から大正時代の産婦人科医として知られている。緒方拙斎の養子で、帝国大学卒業後、一八八八年にはドイツなどに留学した経

歴を持つ。その後、緒方病院の産婦人科長となり一九〇二年に、大阪今橋に緒方婦人科病院を設立した。著作に『日本婦人科史』、ヘーゲルの翻訳本『社会的色欲論』なども出版している。近松会の会長、副会長共に演劇や近松門左衛門の研究者ではなかった。近松会は何故、設立されたのか。一九一〇年七月の創刊号に掲載されている「近松会趣旨」によれば次の通りである。

文豪巢林子近松門左衛門の文学に浄瑠璃に歌舞伎劇にその功績の偉大なることは、更めて説くまでも無く遍く世間の知る所なり、殊に昨今は外國人が日本文学史を著して廣く世界に布くやうになり、近松を英國のセキスピアー、獨逸のワグネルに比するものもあり、實に近松の作品が人情の徴を穿ち世味の實を畫したる妙は、決してセキスピアーに譲るべくもなく、この浄瑠璃の樂曲に音節

の妙を極めて入神の技あるは、また決してワグネルに劣らざるなり、されば近松巢林子は、單に文学の人として偉大なるのみならず、浄瑠璃の樂劇作家として偉大なることは、英獨の二大文豪をその一身に兼ねしものといふべし、二百五十餘年前の日本に斯かる大文豪の生れたるは、わが同胞の光榮ならずや、ワグネルは獨逸が樂劇の聖人として近代に誇る所、セキスピアーは英國が世界の文豪として永遠に誇る所、世界の文人樂家は孰れも此二家の作品を研究して新しき作品に資し或は考證に努めつゝあり、二家記念すべき設備は、銅像に文学会に音楽会に文人協會に図書館に挙げて數へきれぬ程なり、わが文豪巢林子近松門左衛門翁の遺績は、日本に於て如何に記念されあるか、巢林子か、その事業を成したる地の大阪に於てすら如何に記念されあるか。(一〇二頁)

ここで気になるのは「その事業を成したる地の大阪に於てすら如何に記念されあるか」である。この頃ではすでに東京では近松門左衛門の研究は塚越芳太郎や坪内逍遙によつて発表されていた時期でもある。しかし、上演、人形浄瑠璃については、大阪が本場である。植村文楽軒（一七五一・一八一〇）が人形芝居座を高津新地に設け、その後難波新地に、そして一八七二年には三代目の文楽軒が松島新地に劇場を立て、文楽座と命名した。その後一八八四年に御霊神社の境内に移り、御霊文楽座は唯一の人形浄瑠璃の劇場となった。その後は一九〇九年三月に経営は松竹に移ることになった。演劇にとつて劇場の存在は重要であることは当然であるが、人形浄瑠璃のような形態であれば、なおのことその存在は大きな役割を果たすことになる。従つて、一九〇九年三月で劇場の問題はここで落ち着き、ようやく近松門左衛門の研究に取り組めるようになったとみるべ

きであろう。近松会の会長、副会長が実業界等と関係の深い人物であることはこうした背景の顕在化とも言えるだろう。それが翌年の一九一〇年に近松会の設立ということだ。創刊号には坪内逍遙も「近松の新釈につきて」という文章を寄せている。なお、この近松会のことについては早稲田大学演劇博物館編『演劇百科大事典』（全六巻）では取り上げられていないが、『坪内逍遙事典』（平凡社、一九八六年五月）では項目として「近松会」はないが、「近松会雑誌」の項目はあり、わずか十行の説明であり、大きな取扱いではない。他の演劇関係の事典類には項目として掲載されていないようだ。近松研究会編『近松門左衛門―研究入門―』（東京大学出版会、一九五六年八月）、園田学園女子大学近松研究所編『近松研究の今日』（和泉書院、一九九五年三月）にも取り上げられていない。筆者の調査では、近松会というよりは『近松会雑誌』が取り上げられたのは鳥越文蔵

「世界に広がる近松」(近松生誕三百五十年記念近松祭企画・実行委員会『近松門左衛門 三百五十年』和泉書院、二〇〇三年十二月)であった。しかし、詳細は明らかではない。

二 『近松会雑誌』の刊行

『近松会雑誌』の刊行について一九一〇年七月の創刊号には緒方相山「近松会雑誌の発刊に際し聯か近松を論じ更に藝林の諸子に及ぶ」で次のような文章が寄せられている。

蓋し近松の才華を博識とは其著作の上に於て、英のシェークスピア獨のゲーデに酷似し、而も漢文の樊籬を空破して、雅俗一丸能く之を圓熟に、
(十五〜十六頁)

また、鈴木文雄「近松会雑誌の発刊に就て」でも次

のように記されている。

英にシェークスピアあり。獨にゲーテあり。共に一代の文豪にして、長へに國民の誇たり。我國の近松巢林子はシェークスピアの兄たり難く、ゲーテの弟たり難く、我大和民族の忘るべからざるの一大文士なり。(二頁)

一九〇九年〜一九一〇年には坪内逍遙は次のよう活動を行っていた。

一九〇九年十月 近松展覧会での講演「近松対シェークスピア対イブセン」
一九〇九年十月 「近松対シェークスピア対イブセン」(『読売新聞』)

一九一〇年六月 「近松とシェークスピア」(水谷不倒校訂注釈『近松傑作全集』第一巻、早稲

当時はシェイクスピアと近松門左衛門の比較がすでに行われていた時期である。重要なことはこのところではない。筆者が最も注目したのは「近松会趣言」の次の部分である。(下線部筆者)

文豪巢林子近松門左衛門の文学に淨瑠璃に歌舞伎劇にその功績の偉大なることは、更めて説くまでも無く遍く世間の知る所なり、殊に昨今は外國人が日本文学史を著して廣く世界に布くやうになり、近松を英國のセキスピア、獨逸のワグネルに比するものもあり

「殊に昨今は外國人が日本文学史を著して」とは、

William George Aston. *A History of Japanese Literature* (1899) の「ハ」を指しつつあり、同書では以

下の様に指摘されている。

Of Chikamatsu's merits as a dramatist and poet it behoves a European writer to speak with some degree of reserve, more especially as it is impossible to read more than a tithe of his works. The admiration of his own countrymen for him is unbounded, some of them going so far as to compare him with Shakespeare. It is certainly possible to trace resemblances.

Both in Shakespeare and Chikamatsu, comedy frequently treads on the heels of tragedy ; in both, prose is intermixed with poetry, and an exalted style of diction suited to monarchs and nobles alternates with the speech of the common people; both divided their attention between historical and other dramas ; both

possessed the fullest command of the resources of their respective languages, and both are tainted with a grosser element which is rejected by the more refined taste of later times. It may be added that neither Shakespeare nor Chikamatsu is classical in the sense in which we apply that term to Sophocles and Racine, Chikamatsu in particular is very far removed indeed from the classical type. (iii)

William George Aston. *A History of Japanese Literature* (1899)を翻訳したのが芝野六助訳補『日本文学史』(1908)である。前述の原文に対する翻訳は次の通りである。

戯曲家として、詩人としての近松の功績に関しては、西洋人は、成る可く口を慎むこそよけれ、

況して、其の著書の一部分か見ざるをや。近松に對する日本人の賞讃、其の極に達し、甚しきは、之を沙翁に比する者すら有り。然り、彼と是と確に相似せる點あるのを見る。沙翁・近松俱に、喜劇を悲劇の中に演じ、俱に散文に韻文を雜へ、俱に王族・貴族・平民等身分に應じて文體を異にし、俱に時代物、世話物を作り、俱に用語には大いに威嚴あり、俱に、清新なる近世の趣味に適せざる、稍々俗氣ある材料を採り、俱に、吾人が Sophocles 及び Racine に與へたる意味に於ける最高文学者にあらず、殊に近松は此の標準に於ける型式を距ること遙に通し。(iv)

時系列としては一八九九年には英文のアストン『日本文学史』出版、一九〇八年にはその翻訳の芝野六助訳補『日本文学史』の出版、一九一〇年に近松会設立、『近松会雑誌』創刊となる。ちなみに『近松会

雑誌』は CINI よれば二〇一五年十二月二日現在、『近松会雑誌』を所蔵している研究機関は五箇所である。関西大学図書館、札幌大学図書館、昭和女子大学図書館、昭和女子大学図書館近文庫、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館図書室である。国立国会図書館には所蔵されていない。しかし、ネット検索で「義太夫文献一斑」を見ると園田学園女子大学近松研究所にも所蔵されているようだ。(五)

エピソード

一九八九年四月には園田学園女子大学近松研究所が設立され、翌年には『近松研究所紀要』が発刊されている。創刊号(一九九〇年六月)の「創刊号のことば」(二頁)を見ると研究所の事業計画を見ると、画像データベース化、コンピュータ版近松全集総索引の開発、日本演劇及び近世文献目録の編集、地域文化への寄与の四点がある。今やどの分野でもデー

データベース、IT化の傾向がある。日本を代表する演劇として近松門左衛門の研究が進むことは望むべきところだが、『近松会雑誌』の創刊内容を見れば、それが、明治の近代化の中の日本の演劇改良運動、あるいは海外の日本の研究者から大きな注目を浴びたことが近松門左衛門の研究の原点であるところとは否定のできないところだ。日本にシェイクスピアが受容されたことよって、研究の対象として近松門左衛門が脚光を浴びたことは皮肉のこととも言える。

注

- (一) 下中邦彦編『日本人名大事典(新撰大人名辞)』(第四卷)(平凡社、一九八六年三月)、三八七、三八九頁。

- (二) 「通天閣オフィシャルサイト」

<http://www.tsutenkaku.co.jp/shiryo/index.ht>

m#2818039453331681) (二〇一五年十二月四日アクセス)

(三) William George Aston. *A History of Japanese Literature* (Tokyo: Charles E. Tuttle Company, Inc.), p.278.

(四) 芝野六輔補訳『日本文学史』(大日本図書、一九〇八年五月、六一―六一二頁。

(五) 「義太夫文獻一斑」

(<http://www.oneg.zakkaz.ne.jp/~gara/ongyoku/jouhou63.htm>)(二〇一五年十二月四日アクセス)

※ William George Aston. *A History of Japanese Literature* のシェイクスピアと近松門左衛門への言及については拙著『江戸時代のシェイクスピア受容』(多生堂、二〇一三年十月)でも取り上げた。ただ、この時には『近松会雑誌』に触れることはなかった。

※「書誌から見た『近松門左衛門とシェイクスピア』

』比較研究」(『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第四輯、二〇一一年四月)では『近松会雑誌』については言及しなかったため、今回取り上げるにとした。なお、『近松会雑誌』について第六号では確認できたが、その以後については確認できなかった。

※『近松会雑誌』については目次だけはある程度ウェブで見ることができる。

<http://book.geocities.jp/ongyoku2/j104/jouhou104.htm> (二〇一五年十二月七日アクセス)